

林泉忠著

『「辺境東アジア」のアイデンティティ・
ポリティクス——沖縄・台湾・香港』

金戸幸子

I はじめに

——沖縄・台湾・香港が共通して抱える
住民アイデンティティの問題

本書は、沖縄・台湾・香港を包括して「辺境東アジア」という新しい地域概念を提起し、「民族」と「国家」の視点から、そのもっとも重要な特徴である「帰属変更」によってもたらされたこの3つの地域のダイナミックなアイデンティティ・ポリティクスを考察した力作である。著者は中国集美（廈門）生まれで、幼少時代に香港に移住、のちに日本に留学し、東京大学大学院法学政治学研究所で博士号を取得した新進気鋭の政治学者である。現在、琉球大学助教授で、本書は博士論文をもとにしたモノグラフである。

ポスト冷戦期において、既存の国家枠組みないし世界システムの動揺によって、「民族」と「国家」との関係をめぐる世界各地で民族問題が噴出している。東アジアにおいても、1980年代以降、これらをめぐるアイデンティティの問題が顕在化した。その代表的な例が、中国に対する「台湾ナショナリズム」および「香港人」アイデンティティの噴出、そして日本に対する「沖縄人」（ウチナンチュ）自立意識の顕在化である。これら3つの地域は、歴史的に

も、そして今日に至るまで政治的にも「辺境」視／化されてきたことで共通している。また、複数の帰属・主権変更と「外国」支配の経験を持つ、といった近代以来の歩みも類似性を有している。このような歴史的背景などを要因に、三地域とも近現代以来、深刻なアイデンティティ問題を抱えてきている。

ここで注目すべきは、台湾、香港そして沖縄で起きたアイデンティティあるいはナショナリズムの問題は、東アジアの「中心」である中国・日本の現行国家システムに対する挑戦を意味するという点である。もちろん、中国や日本は東アジアの超大国である以上、その国家システムの動揺は、この地域の秩序や国家システムにも影響を及ぼすことになる。本書が掲げる「辺境東アジア」研究の重要性は、まさにこの点にあるといえよう。

II 本書の概要

本書は序章と終章を除き、3部7章から構成されている。第1部が沖縄、第2部が台湾、第3部が香港の事例研究である。

序章 本書の視角

第1部 「帰属変更」の遺産としての沖縄
ナショナリズム

第1章 「琉球抗日復国運動」の性格

第2章 戦後初期沖縄諸政党の独立論
 ——失敗した沖縄主体性回復の試み

第3章 「祖国復帰」と「反復帰」
 ——沖縄アイデンティティの十字路

第2部 「帰属変更」の遺産としての台湾
 エスノポリティクス

第4章 「省籍矛盾」と蔣経国の『『本土化』政策』

第5章 「新中国文化」から「新台湾文化」への転轍の政治的文脈

第3部 「帰属変更」の遺産としての香港
 アイデンティティ

第6章 「香港共同体」の確立と「香港人」の想像・創造

第7章 「一国」VS「二制度」の力学と
 香港住民のアイデンティティ

終章 「辺境東アジア」アイデンティティ・
 ポリティクスのダイナミズム

本書はそれぞれの地域の特徴や先行研究の欠如などを考慮し、各ケーススタディにおいて異なるアプローチが採られている。そのため、沖縄は近代、台湾と香港は現代に考察の重点がおかれている。

まず、序章で「辺境東アジア」の特徴を3つのキーワード、つまり「歴史的辺境性」「帰属変更（「祖国復帰」を含む）」、そして「アイデンティティ」を定義する。その上で、「祖国」との国民統合問題に直結する、「辺境東アジア」住民のアイデンティティ問題の顕在化を、一種の「脱辺境化」の動きとして捉える。

第1部では、沖縄ナショナリズムの史的展開が考察されている。第1章では、近現代「沖縄ナショナリズム」の起点が「琉球抗日復国運動」に求められ、「琉球併合」（1879年）という琉球が初めて直面した「帰

属変更」の際のアイデンティティをめぐる琉球エリート・一般住民の動きに重点が置かれている。「民族の統一」や「国家の統合」を標榜する日本の強制的琉球併合の政治過程と、それによる統治過程や接触過程で生じた諸差別から、沖縄民衆の「沖縄人」（ウチナーンチュ）という自己意識と「大和人」（ヤマトンチュ）という他者意識が定着していった過程が解明されている。

第2章では、1945年第二次世界大戦の終結に伴う沖縄の2度目の「帰属変更」によって浮上していた戦後初期沖縄本島諸政党の「独立論」を中心に、当時沖縄社会の「離日」現象がとりあげられている。また、「政治的自立」や、それを内包しうる沖縄主体性回復の試みが頓挫した背景と要因が考察されている。そこから、この時期の沖縄ナショナリズムは、他律的「大国依存主義」的な性格を持っているとされ、その歴史的連続性から、こうした強固な自主性が欠落している沖縄ナショナリズムの性格を「凧型ナショナリズム」（91-92ページ）と規定する試みが行われている。

そして、第3章では戦後アメリカ統治期（1945-1972年）に起きた「祖国復帰」と「反復帰」をめぐるイデオロギーの形成基盤と性格がとりあげられている。1950年代に始まった日本志向の復帰運動が一体化・絶対化していくなかで出現したのは、それを牽制しようとする「反復帰運動」であった。本章では、ときには「日本人」になろうとしたり、またときには「沖縄アイデンティティ」を強調したりしようとする、戦後沖縄住民が形成してきた複雑なアイデンティティの構造が、「祖国」をめぐる「記憶の選択」を切り口として明らかにされている。

第2部は台湾の事例研究である。第2部では、政治体制とアイデンティティとの関係について、戦後すなわち台湾が二度目の「帰属変更」を経験した1945年以降の台湾社会の変遷が主な分析の範囲とされている。そこで、第4章は政治的視点、第5章は文化的視点から台湾住民のアイデンティティの形成や変遷が検討されている。

第4章では、エスノポリティクスの視点から、蔣経国時代の『『本土化』政策』が、いかなる背景で制定かつ遂行されていたか、またいかなる影響を持っていたのかが分析の対象として取り上げられている。この分析を通して、国民党政権の「本土化」と、「本省人」対「外省人」という戦後台湾最大のエスニック問題であり社会問題でもある「省籍矛盾」との関係の解明が試みられている。蔣経国の『『本土化』政策』によって、「省籍矛盾」が徐々に解消され、ナショナル・アイデンティティ問題としての「台湾ナショナリズム」の顕在化が促進されることになった。一方、本章では、のちの李登輝政権に続く『『本土化』政策』の徹底化がもたらしたもうひとつの重要な点として、外省人と本省人の権力逆転から生まれた外省人の危機感に由来する新しい「省籍矛盾」など、新たなエスニック・アイデンティティ問題も生成させてしまったことが指摘されている。

第5章では、「外来政権」である国民党の政治権力の消長を背景とした、台湾戦後文化史の主な流れが、「新中国文化」から「新台湾文化」への転轍として把握され、「中国人」アイデンティティと「台湾人」アイデンティティの構造上の性格が吟味されている。本章では、政治的側面と文化的

側面の両面にわたる李登輝の「全面的『本土化』政策」のほか、一般大衆に最も影響力のある流行歌と映画も分析の事例に取り上げられている。ここで、80年代末から顕著に見られた「全住民『本土化』運動」活動家たちが掲げてきた理念とは、ひとつは「台湾主体性」の確立であり、もうひとつは、ほかならぬ「辺境拒否論」、つまり「辺境性」を濃厚に帯びている台湾史からの脱却を目指す台湾社会の「脱辺境化」運動（189-190ページ）でもあったことが明らかにされている。

続いて第3部は、香港の事例研究である。まず第6章では、アイデンティティ形成の不可欠な基盤である域内の一体化、すなわち地域共同体としての「香港共同体」の確立過程が考察されている。その上で、創造性・想像性の濃厚な新生アイデンティティとしての「香港人」意識の生成要因と特徴が探求されている。本章では、香港住民の「香港人」意識は1960年代半ばから形成され、そのアイデンティティも1970年代末までは弱かったが、80年代後半に向けて強力になったことが指摘されている。興味深いのは、「香港人」アイデンティティは、一部は「中国人」アイデンティティと重複しているものの、異民族で植民地支配者であるイギリス人を相手とせず、「同民族であるはず」の「中国人」が「仮想敵」とされていることである。そして、「返還問題」で顕在化した「香港人」アイデンティティの基本的性格を「準ナショナリズム」と規定する試みが行われている。

第7章においては、返還後の1999年に起きた「終審権論争」を事例として、ポスト返還期における香港住民のアイデンティティの動向が検証されている。返還以降の

香港における国民統合の進展の特徴として、「一国」という枠組みの下で香港と中国本土の一体化が進んでいることが挙げられる。そこで、この事件でクローズアップされた「一国」と「二制度」の攻防戦分析を通じて、当論争での「一国優先論」の勝利という結果から、ポスト返還期の香港の政治地図を規定する最も重要な境界線は、「親中」か否かであり、今後の「香港人」アイデンティティの行方は、依然として「一国」対「二制度」の力学によって規定されていると分析されている。今後、台湾に続き、「準ナショナリズム」が「ナショナリズム」に上昇するかどうか目が離せない課題である。

終章では、前章までの議論とそこから得た知見を整理し、序章で示した仮説も踏まえつつ、「辺境東アジア」のアイデンティティ・ポリティクスのダイナミズムを再考し、今後の課題が示されている。

Ⅲ 本書の価値と今後の課題

本書の価値と独創的な点は、沖縄・台湾・香港を包括して「辺境東アジア」という新しい地域概念を提起し、エスニシティやナショナリズムをめぐるアイデンティティ研究はもとより、従来の東アジア地域研究に対して新たな視角と枠組みを提示することに成功している点である。さらに、これら三地域の「帰属変更」は、沖縄は「復帰」、台湾は「光復」、香港は「回帰」というように、その性格を異にするが、近現代における「帰属変更」という共通の歴史経験をもとに、これらの地域を同一平面上に置き、比較を行ったところに著者のオリジナリティがある。そこから、国民統合にと

もなりアイデンティティ・ポリティクスが発生したという課題設定はきわめて妥当なものである。その上で著者は、中心から離脱する脱辺境化の進展、独自のアイデンティティ形成など、この地域に共通する現象を抽出する。これは「辺境東アジア」のアイデンティティの模索過程であると同時に、「中心—辺境」関係の変容でもあった。

本書は、「辺境東アジア」アイデンティティの顕在化・政治化を左右する諸変数を、住民の意向、「母国」との関係、そして「返還」のパターンの相異、という3つのカテゴリーに集約している。「辺境東アジア」地域の土着アイデンティティは、悠久な歴史の中で自然に生成され、次第に強固になったのではなく、帰属・主権変更や「祖国復帰」に伴った近代社会が進むなかで形成されたとする。つまり、「沖縄人」「台湾人」「香港人」という社会的普遍性を持つ文化的アイデンティティもしくは政治的アイデンティティは、いずれも遠い昔からすでに存在していたものではなく、近代になってから始めて出現した社会現象(292ページ)であることである。そしてアイデンティティの生成・活性化要因という側面から見た場合、「沖縄人」をまとめる絆は、主に共有している血縁、歴史文化、歴史的歩みといった要素から構成される一方、「台湾人」と「香港人」の凝集力は、血縁や伝統文化よりも、同じ歴史的経験及びそこから生まれる集合的記憶によるものであることが明らかにされている。それは、まさに社会の激動、増幅した接触・交流、利益の争奪といった近代性に刺激されて活性化されたものであり、その本質は可変的なものであり、想像されたり、また創造され

たりした側面を濃厚に有していることが浮き彫りにされるのである。

東アジア地域のダイナミックな変化を、ともすれば日中、中台など二国間関係で捉えがちな視点から解放し、立体的で重層的な、より現実の社会空間に根ざした地域構造を探る——そうした作業において、本書が提示するモデルは有益である。「近代国家」やナショナリズムを歴史化するスタンスにも共感を覚える。本書により、エスニック・アイデンティティの政治化に象徴される、「辺境」問題を抱えている近現代東アジアの国家システムと、それに相関する観念の構造解明にヒントが与えられるであろう。同時に、21世紀に対応できる安定した国家システムの構築、ひいてはそれに必要な新たな国家観念の形成に有効な視座がもたらされるに違いない。

以上のように、本書の質と完成度はきわめて高く、関連諸分野への貢献が大きいことはあらためて強調するまでもないであろう。最後に、本書の意義を十分踏まえた上で、今後の展開に期待する点として評者のコメントを2点挙げておきたい。

第1に、著者が終章において今後の課題のひとつに示しているように(299ページ)、「辺境東アジア」研究において、現在の国家の理念と実態のズレ、そして国民国家の枠の外に排除されてきたマイノリティの尊厳・利益に目を向けるのであれば、本書でも触れられていないわけではないが、より民衆レベルの人々や集団の意向・反応についても、今後継続して考察を行うことが望まれるであろう。その意味で、例えば「沖繩」の事例研究では、沖繩本島ともまた少し異なる地理的・歴史的経緯や住民アイデ

ンティティを持つとされる宮古・八重山諸島にも、もう少し言及される必要があるのではないかと思われる。

第2に、欲をいえば、「中心」が各局面で「辺境」をどのように認識し、いかなる働きかけを行ったのか(または行わなかったのか)についての考察があればもっとよかつたのではないかと思われる。なぜならば、90年代以降、「辺境」に住む人々のアイデンティティばかりでなく、「辺境」に対する「中心」の人々の認識にも大きな変化が見られるからである。そして実際、そうした要因も「辺境」の人々のアイデンティティを変容ないしは高揚・顕在化させ、「脱辺境化」に向かわせているひとつの要因と考えられるからである。

このような課題が残されているとはいえ、本書は全体として非常に優れた分析を行っている。「辺境」「周縁」から派生した「住民アイデンティティ」の流動性・重層性・複雑性をめぐる諸問題を通して、近代以降の国民国家の枠組みが批判的に検討され、多くの興味深い示唆に富む結論が導き出されている。著者が本書の最後において強調するように、「中心」との軋轢によって「辺境」から派生した諸問題を根源から取り除く体制を設けなければ、新しい地域や世界の安定も望めないであろう。21世紀は、まさに「辺境」や地方からなる地域秩序をベースにした「下から」の国際関係や世界システムの構築が求められている。これからの関連研究に対して、本書を必読書として強くお勧めしたい。

(明石書店、2005年3月、A5判、xv+312ページ、定価4,000円[本体])

(かねと・さちこ 東京大学大学院)